

CU-MU-IMS Faculty Exchange Meeting 2024開催報告

報告：生命・錯体分子科学研究領域 飯野 亮太

2024年3月6日（水）に研究会、CU-MU-IMS Faculty Exchange Meeting 2024を開催しましたので報告いたします。タイのチュロンコン大学（CU）理学部と分子研は、基本合意書（Memorandum of Understanding）を交わして提携しております。特に、理学部化学科と長年緊密に提携しており、分子研アジア国際インターンシッププログラム（IMS-IIPA、<https://www.ims.ac.jp/iipa2024/>）で毎年、学生や若手教員の受け入れを行っております。今回、提携のさらなる強化と拡充を目的とし、化学科からVoravee P. Hoven教授（学科長）、Mongkol Sukwattanasinitt教授、Anawat Ajavakom准教授、Boosayarat Tomapatanaget准教授、Thanit Praneenarat准教授、Junjuda Unruangsri助教、Boodsarin Sawatlon講師、物質科学科からWuttichai Reainthippayasakul講師が分子研を

訪れました。

午前は、上記のCUからの参加者に機器センター、計算科学研究センター、極端紫外光研究施設（UVSOR）を見学して頂き、大学共同利用機関法人としての分子研の役割の解説を行いました。午後は、CUからの参加者に加えてタイのマヒドン大学（MU）理学部化学科からPanida Surawatanawong准教授、さらに分子研から渡辺芳人所長、山本浩史教授（研究総主幹）、横山利彦教授（機器センター長）、江原正博教授（計算科学研究センター長）、解良聡教授（UVSOR施設長）、魚住泰広教授、瀬川泰知准教授、岡崎圭一准教授、飯野が加わり、研究会を開催しました。渡辺所長による分子研の概要紹介、Hoven教授によるCU理学部の概要紹介、およびSurawatanawong准教授によるMU理学部の概要紹介に加え、各参加者が研究活動の紹介を行い、

活発な質疑応答と議論が交わされました。活発な議論は、研究会後に開催した懇親会でも続きました。懇親会で私の正面に座られたAjavakom准教授は大阪大学で学士号と修士号を取得され、隣に座られたPraneenarat准教授はご兄弟が東京在住とのことで、研究だけでなく日本の文化についても議論が盛り上がりしました。

今回、お互いを深く知るためには対面での交流が重要だと再認識いたしました。今後は、CU理学部化学科だけでなく、CU理学部物質科学科やMU理学部化学科との提携も進めていきたいと考えております。皆様のご協力を何卒よろしくお願い致します。



写真（左）分子研正面玄関での記念撮影。（右）懇親会での記念撮影。

第18回日韓分子科学シンポジウム “Cutting-Edge Molecular Sciences from Elementary to Complex Systems”

報告：理論・計算分子科学研究領域 石崎 章仁

2024年6月23日から26日の4日間、韓国プサンにおいて、第18回日韓分子科学シンポジウム“Cutting-Edge Molecular Sciences from Elementary to Complex Systems”が開催されました。本シンポジウムは、1984年に分子科学研究所と韓国科学技術院（KAIST）の間で分子科学分野での共同研究プロジェクトの覚書が交わされて以来、両国間の交流事業として2年に1度、日本と韓国が主催を交代しながら開催してきたものです。2006年には覚書の相手先がKAISTから韓国化学会・物理化学ディビジョンに変更となり、今回のシンポジウムは韓国化学会・物理化学ディビジョン主催での開催となりました。

この第18回は当初2021年にプサン開催が予定されていましたが、2020年初頭からの新型コロナウイルス感染症の世界的流行があり、また、対面開催への先方の強い要望もあり、開催延期となっていました。2023年中頃に

新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが2類相当から5類へ変更されたタイミングで2024年、前回の名古屋開催から5年ぶりに開催することができました。感染症流行による大混乱があり、今回開催の実務責任者を務められた亞洲大学化学科Hyuk KANG教授には大変なご苦勞をされたこととお察しいたします。

今回のシンポジウムは化学反応をキーワードに物理化学の全領域を広くカバーしたプログラムが組まれました。日本側は、分子研から渡辺芳人所長、斉藤真司教授、松井文彦教授、杉本敏樹准教授、櫻井敦教助教、富田隆文助教、ExCELLSから近藤徹教授、岡本泰典准教授、東工大からは数年前まで分子研助教でいらした伊澤誠一郎准教授、また、分子科学会から会長・佃達哉教授（東京大）、副会長・岩田耕一教授（学習院大）にご参加ご講演をいただきました。韓国では米国同様 Assistant Professor がPIとして独立しており、物理化学ディ

ビジョン長Sang Kyu Kim教授(KAIST)の強力なリーダーシップのもと、韓国中から若い物理化学PIが参集しました。今回は日本側も助教の方々にご講演をお願いしましたが、シンポジウム後の懇親会では夜遅くまで意気投合していたようです。未来へと続く若い世代の日韓交流こそが、対面開催に拘った本シンポジウムの重要なミッションでしたので、非常に意義深いことだったと思います。

1984年に開始された日韓シンポジウムも、ちょうど40年が経過しました。時代や学術の潮流も変わり、また今回、新型コロナウイルス感染症の世界的流行の大混乱にも見舞われました。今後どのように日韓シンポジウムを組織、開催していくべきかを再考する時期に来ているのかもしれません。次回の第19回は、2026年に日本開催が予定されています。今後とも御協力をよろしくお願いいたします。

